

# 結論への到達を目的とした議論における「私」の表示

## —日本語非母語話者の意見表明に着目して—

大和 祐子

### 1. はじめに

議論の会話では、会話参加者の間で出される意見が提案に対して「賛成」「反対」を示しているのか、もしくは新たな提案がなされているのかなどをその場で判断し、その議論の流れの中で自分の意見を効果的に述べるのが重要になる。またこのような言語行動を、特に日本語を外国語とする日本語非母語話者(以下、NNS)が行う場合、(1)長い発話を必要とする情報伝達行動は日常生活で必要とされているものであるが、(2)短い発話の情報伝達行動ができるからといって、長い発話の情報伝達活動も自然にできるようになるとは限らない(Brown and Yule 1983:16-24)。そのため、NNSが参加する議論の会話がどのように構成され、NNSはそのなかでどのようにふるまっているかを明らかにする必要がある。

本稿ではまず、結論に到達するまでの議論の会話の流れを確認し、意見表明<sup>1</sup>で不可欠となる要素について考える。その上で、議論のなかで結論生成を行うにあたって重要になっていると思われる社会的アイデンティティの表示について観察、検討する。本稿ではその中でも特に、NNSの第二言語使用環境におけるアイデンティティの表示について、議論場面を中心に考察する。

### 2. 分析対象

本稿では、2003年から2006年にかけて大学内で実際に行われたグループワークの議

---

<sup>1</sup> 議論において結論に到達するまでの過程には、提案、反対意見表明、賛同などさまざまな要素を含む会話がなされるが、本稿では聞き手としての賛同の表明なども含め、すべての発話を「意見表明」として扱うこととする。

大和祐子

論の会話を用いた。これらの会話はそれぞれ1時間から2時間程度のもので、3人以上の会話参加者からなっているものである。また各会話は、日本語口頭能力が上級以上のNNSを含む、いわゆる接触場面会話である。会話に参加しているNNSの国籍は中国、台湾、韓国、アメリカで、母語は中国語、韓国語、英語と様々であった。

### 3. 結論が生成されるまでの過程とは

議論では、会話参加者が反対意見や解決策、もしくは結論を生成するために必要な情報を重ね合わせることによって、議論が精緻化し、結論が生成されている。まず、議論における一連の流れを確認するために、会話参加者の1人からある案が提案されてから結論が生成されようとするまでの一例を以下に示す。

#### 【会話例 1】

- 1 Y: >でもテレビとかはいいよね↑<テレビを見て勉強するのは好きかどうか
- 2 J: んん
- 3 Y: (. 5)っていうのは聞くといいかなって思う
- 4 Ha: (1°)でもなんか°テレビかなんかを見るっているのは(. ) °天気予報とか+
- 5 Y: °ん[::↑°
- 6 T: [あんさ::例えば>自分に合った学習方法<っていうのは(. )クラス内で
- 7 自分に合った学習方法それとも例えば°今さっき言った°self studyの中で
- 8 (. )ホント自分が合う(. )教室でもどこでも当てはまる:方法か(. )
- 9 Y: °ん::°
- 10 T: それともクラスの中で行われる活動の中で自分に合う学習方法どっち°か° +=
- 11 Y: =[(...)
- 12 K: =[それは両[方
- 13 T: [(それ)だと::(. )ラジオを聞くとかテレビを見るとかっていうのはす
- 14 ごく(2)いつもいつも見るわけじゃないよね::↑テープを聞くって言うんだって
- 15 ら分かるんだけど::
- 16 Y:ん::
- 17 T: (2)それでチェックするのかな::(. )と思って
- 18 J: でもこれは(. )あの(. ) (聞くと)一番効果的な方法だからま::授業でやったかど

結論への到達を目的とした議論における「私」の表示

- 19 うかとか:°間(. )係(. )な(. )い+°  
 20 T: な:::そう<だと>するとまじや:クラス:::という枠を超えて:(. )自分で勉強するとき  
 21 も含めた上で::語学を  
 22 Y: うんうん  
 23 T: 勉強するときに自分に合った方法を聞くっていうこと↑  
 24 J: や(. ) 両方とも含めてる  
 25 T: ん:::だから広く聞くってことだよね↑  
 26 J: ん  
 27 (2)  
 28 E: 私(. ) >なんか<同じようなの聞いたことあるんやけど::hh(. )10人くらいの台  
 29 湾の人に(. )  
 30 Y: ん↑どれ?  
 31 E: その°(….)°(. )別に聞かないと::考慮に入れてないと思う(1)>なんか<特別  
 32 に聞かないと:  
 33 Y: んん  
 34 T: °ふ::ん°  
 35 E: 自分で勉強するときを>だから<テレビとかは出てこないから::(. )例にいつば  
 36 い出してればいいかもしれないけど::(1)>なんか<自由に書くようにして例に  
 37 いっぱい[(. )出しといってもらえば::  
 38 Y: [ふんふん  
 39 E: >そういうのも入るんだ<って  
 40 J: other(. )かもしれないね↑  
 41 (1)  
 42 E: °あと°選択肢にしてその他にするか::+(1)でもその選択肢につられるからな(. )  
 43 学習者って  
 44 Y: [ん:::  
 45 Hi: [ん:: (1)°めんどくさいしね(. ) アンケート答えるの°  
 46 ?: ((笑い))  
 47 T: だから俺は最初から(ね::)この四技能っていうのでいいかな:::と思ったのね  
 48 Y: あ::  
 49 T: もう大雑把に=

大和祐子

50 Y: =[う::ん

51 K: =[ん::

52 (3)

53 T: >っていかく自分に合うってことはつまりは自分はこういうことを中心に勉強し

54 たいってことでしょ↑

55 (3)

56 Y: どうなのかな?

57 T: まあ違うかもしれない[ nhh

58 Y: [nhh (. ) ん::

【会話例1】は、大学内での日本語教育実習の準備段階において、学習者に対して行うアンケート項目を決める場面での接触場面会話である。

学習者へのアンケートの中の、学習者の語学学習経験や学習者のこれまでの語学の学習方法などの質問項目を決定するための会話であり、まず Y(JNS)がテレビを見ることによって言語を学習するのが好きかどうかを質問する方がいい、と提案している(1-3行目)。そして T(JNS)が「学習方法」という質問項目の詳細に関する説明要求を行い(6-10行目)、K(JNS)の回答を受けて(12行目)、T(JNS)が今提示されている案に対して反対意見を表明している(13-16行目)。その後 J(NNS)は、Y(JNS)が提案している意見に賛同していることを、T(JNS)の意見に反対表明する形で述べている(18-19行目)。ここでさらに、T(JNS)は詳細情報を要求し、他の会話参加者の「学習方法」についての認識を確認している(20-25行目)。その後、E(JNS)によって、台湾で日本語教育に携わっていたときの経験談が語られ、その経験に基づいた提案がなされているところから、さらに議論が発展している(28行目-)。

このように、複数の会話参加者によって結論が生成される過程において、それぞれの会話参加者が自分の経験などを埋め込むことにより情報を付け加えたり(28行目-30行目)、反論の根拠となる情報を提供したりすることによって議論が結論に近づいていることがわかる。

【会話例1】からも分かるように会話参加者が行う「意見表明」の手段として様々なものが考えられる。この会話を観察する限り、すでに出されている提案に単純に賛成・反対を表明する発話やそれに類似する役割を果たす発話(56行目)ばかりで意見表明がなされているわけではない。その他、一見議論とは直接関係のない情報が埋め込まれることもある。それは、ニュースなどで見聞きしたような、ある程度客観的な情報を述べる場

場合もあれば会話参加者が経験した話を語る場合もある。

【会話例1】の場合も、会話参加者の1人であるE(JNS)が台湾で日本語教育に携わっていた際に行ったという学習経験の調査を例に挙げたことで、自分の意見に説得力を持たせることに成功している。また、その経験をもとに E(JNS) が新たな提案をしたことが、議論全体を発展させているのに役立っていると言える。

## 4. 社会的アイデンティティ

### 4.1 意見表明に用いられる「私」の表示

【会話例1】からも観察されるように、提案や反対意見表明などの意味をもつ各種の意見表明の発話を行う1つの方法として、自分の経験を語るということがある。またそれ以外にも、自分の経験をあるまじりて語らずとも、自分の存在との対比を行うことによって対比させた人との意見と対峙していることが暗示的に表現されることが考えられる。

これらの意見表明には、会話中の「私」の立場と他の参加者の立場との相違を利用することが不可欠であるといえるだろう。

### 4.2 成員カテゴリー化装置

会話の中での「私」の立場は、「自分が何者であるか」ということを述べることより、インターアクションを通して「自分が何者として行為しているか」について述べることだろう。それは、会話参加者が「私」を表示する際、他の参加者との関係から見た「私」を表現しており、会話の最初から最後まで首尾一貫した「自分が何者であるか」を表現しているわけではないからである。

エスノメソロジーでいう社会的アイデンティティとは、単に「自分が何者であるか」ということを指しているのではなく、他者とのインターアクションを通して、本人だけでなく他の会話参加者と協働で作上げられ、状況に応じてその時々に見えるアイデンティティのこと(Sacks 1972、西阪 1997)をいう。

Sacks は会話参加者がそれぞれのアイデンティティを示す上で、会話の中で何らかのカテゴリーに属す、と捉え、成員カテゴリー化装置をいう概念を用いている。それによると、会話参加者は自分が属するカテゴリーをいくつも持っており、会話の中ではそのうち1つのカテゴリーが当てはめられる、としている。また、その Sacks のいうカテゴリーの中に

大和祐子

「カテゴリー対」と「カテゴリー集合」というものが存在する、としている。

本稿で扱う学生間のグループワークの議論会話にこの概念をあてはめてみると、「カテゴリー対」は、「日本語母語話者（以下、JNS）／NNS」など相対するカテゴリーを指し、「カテゴリー集合」は「クラスメート」などのようなものを指す。

以上のことをふまえ、本稿では Sacks (1972) の成員カテゴリー装置に従って分析を行う。

#### 4.3 カテゴリー適用における「適切さ」と「規範的期待」

先に述べたように、Sacks によると、それぞれの会話参加者はいくつものカテゴリーをもっている。例えば、1人の会話参加者が「母親」「女性」「日本人」「英語学習者」などの複数のカテゴリーを持っているとされる。

またそれと同時に、Sacks は、それらの複数のカテゴリーから、会話の中で1つのカテゴリーが「適切さ」という基準から選択されるものであることも指摘している。

本稿で扱う、議論会話においても会話参加者であるNNSは「学生」「日本語学習経験者」「〇〇人」という複数のカテゴリーをもっていることが予想される。しかしそのすべてのカテゴリーがそのNNSに当てはまるもので「正しい」ものであるが、状況によって「適切である」かどうかということは、会話の状況に応じてたえず変化する。

さらに、西阪(1995)がSacksの概念に含意されると指摘している「それぞれのカテゴリー(の担い手)は、とりわけ同じ集合の他のカテゴリー(の担い手)に対して特定の係わり方をすることが一般的に期待されている」という考え方も、本稿でNNSの意見表明を通じた「私」の表示を観察する上で参考になる考え方であると言えよう。

### 5. NNSの意見表明における「私」の表示

NNSの意見表明を通じた「私」の表示を「成員カテゴリー化装置」の概念により分析した結果、次のような結果が得られた。

まずNNSが「私」を表現するにあたって、次の2種類のパターンがあることが分かる。

- (1) 「私」自身のアイデンティティを会話のなかで表示するパターン
- (2) 「私」の属するカテゴリー対を表示することによって、対峙する「私」のアイデンティティを表示するパターン

以下で、それぞれのパターンを観察していく。

## 5.1 「私」のアイデンティティを表示する

議論における意見表明の方法の1つとしてみられる「自分の経験談を語る」などの言語行為では、「私」自身のアイデンティティが表示されることになる。しかし、その「私」の表示にこめられた発話者であるNNSの「声」は異なる。

### 5.1.1 「学習者」としての「私」

【会話例2】は、初中級レベルの日本語学習者向けロールプレイテストを作成するというグループワークでの議論の中でみられた会話である。ここでは、R(NNS)、T(JNS)、U(JNS)の3名が会話に参加している。以下の会話は、そのなかでもロールプレイテストで相手役となる人を選定する部分の会話である。

#### 【会話例2】

- 1 R: 例えば:°あの°(. )何かその:(. )お互いに何か雑談して::その中に例え+なにかやりもらい表現(1)[とかの言い方は:(. )多分私たち学習者の場合は::あ(・
- 3 ... )相手が上手く伝えるか:あの(. )
- 4 T: [°ん°
- 5 R: あるいは::え(. ) その:(. )聞いたことがない表現とか(. )あ(. )多分(. )相手の方が上手だと思って::影響されてて::間違っって日本語使っちゃう場合があるじゃない↑
- 8 U: °ん::そうなんだ↓°
- 9 R: (1)聞いて::その場合(. )「>そういう<場合はそういう日本語を使うか↓」(1)
- 10 ん::自分が納得して(. )nhh 実は間違っってる日本語で:自分もなんか同じ影響された+
- 12 T: =でもこのロールプレイの状況ではさ:そんなことは...<以下略>

ここでは、R(NNS)がNNSがテストになることによるデメリットについて述べている。その根拠として、R(NNS)は「私たち学習者」は間違っった日本語を相手が仮に使っていても、正しい日本語であると勘違いして使用する(1-7行目)可能性について述べている。さらに「『そういう場合はそういう日本語を使うか』、自分が納得して、実は間違っっている日本語で、自分もなんか影響された」(9-11行目)とR(NNS)自身にも、そのような相手の

大和祐子

日本語に気づかずに正しいと思い込んでいた経験があることを明らかにしている。

また、興味深いのは、R(NNS)が自分を「私たち学習者」と表示した点である。この会話9-11行目の発話は、R(NNS)の個人的な経験とみることができるが、その前の部分(1-7行目)では、主語を「私は」ではなく、「私たち学習者は」としている。この会話参加者のなかでNNSはR(NNS)1人であり、実際にそこにいる誰かと共有するカテゴリーとして「学習者」カテゴリーが存在するとは考えにくい。さらに、「学習者は」ではなく「私たち学習者は」と言っていることから、「学習者は・・・」とR(NNS)が一般論として「学習者」を持ち出したのではなく、この「学習者」は発話している本人である「私」も含まれていると考えられる。このように考えると、ここでのR(NNS)の「私たち学習者は」というのは、「私も含む学習者というの」と言い換えられるだろう。

つまり、R(NNS)は9-11行目で経験として「過去」となった日本語を話す失敗談を挙げながら、今なお「学習者」と意識している「私」を表示しているといえる。

### 5.1.2 「学習経験者」としての「私」

次の例の場合は、前述の「学習者」というカテゴリーとは少し異なっているように思われる。

#### 【会話例3】

- 1 Ha:もし:: (. )テレビ(1)を見て勉強する(1)勉強し[たら+
- 2 K: [これ(. )(・・・)出したじゃん↓
- 3 (1)
- 4 Ha:あの:テ[レビを見て(・・・)+
- 5 Y: [入ってない(. )][これしかない=
- 6 J: [似てるでしょ↑(こっち)と(. )もし興味あったら↑
- 7 (・・・単語)に使える=
- 8 Ha:=んんん(. )アニメから+
- 9 E: え↑なにな[に？
- 10 K: [(・・・何書いてる)のかな::↑って思って
- 11 Y: [う::んそうだよね°
- 12 J: [私たち日本語勉強したとき(. )週に3回テレビを見てて::
- 13 ? : ん::



- 14 J: (1)すごい勉強になっ(た)(3)°あまり役に立たなかつたか[な°  
15 Y: [そんな hh  
16 ?: テレビを見る  
17 J: いっぱいテレビを見たことが(1)hh いけなかつたかやっぱり hh  
18 E: テレビのおかげで中国語しゃべれるようになったんだよ  
19 Y: お:::そうなんだ

【会話例3】は、大学内での日本語教育実習の準備段階における、学習者に対して行うアンケートの項目を決める場面である。ここでの会話参加者は J(NNS)、Ha(NNS)、E(JNS)、K(JNS)、Y(JNS)、Hi(JNS)、T(JNS)のNNS2名、JNS5名であった。

ここでは、アンケート項目の1つ、「学習経験」についての質問に関して、「テレビ」や「マンガ」のような教室外での活動を選択肢に含めるべきかを議論している。まず Ha(NNS)が2度にわたってテレビアニメを見て勉強することについて意見を述べようと試みている(1, 4行目)。それを察知した J(NNS)は Ha(NNS)がこれから話そうとしていることが自分の話そうとしていることと似ていることを確認し(6-7行目)、その発話内容を Ha(NNS)が了承した(8行目)のを受けて、2人の意見表明として12行目から J(NNS)の発話が始まる。

この12行目からの J(NNS)の発話は、Ha(NNS)の同意が得られてから始められたものであるという背景から、J(NNS)は冒頭で「私たち日本語勉強したとき」と発話している。つまり、ここでの「私たち」は単純に「J(NNS)と Ha(NNS)」を指しており、【会話例2】で R(NNS)によって発せられた「私たち」とは意味合いが異なることが分かる。

J(NNS)はその後、「私たち」とことわりながらも、実際は J(NNS)自身の学習経験について語っていることが、その一連の語りをみることによって分かる(12-17行目)。J(NNS)は、「あまり役に立たなかつたかな」(14行目)、「いっぱいテレビを見たことがいけなかつたか、やっぱり」(17行目)など、明らかに「学習者」だった当手を振り返り、自分に対する評価ととれる発話をしている。

さらに通常、J(NNS)が12-17行目で行ったような物語は過去のことについて話されるものであり、その語られた過去と現在を結ぶ役割をもって、14行目や17行目にみられるような評価的な発話が現れるものである(Labov 1972)。そのことを考慮すると、この J(NNS)は、過去のこととして自分の「学習者」だったときの様子を語っており、今の J(NNS)のカテゴリーとは必ずしも一致しないことになる。

大和祐子

つまり、ここで「学習者」だったことを語った J(NNS)は、いわば「学習経験者」というカテゴリーに属して、同じカテゴリーに属す Ha(NNS)の「声」も代弁する形でその他の「(日本語)学習未経験者」である JNS に対して、一連の議論に関して、参考とすべき情報を提供している、とみることができる。

## 5.2 「私」と対峙するアイデンティティを用いて話す

Sacks によると、ある会話参加者がカテゴリーを表示した際、それと対峙するカテゴリーの担い手も同時に存在する、いわゆる「カテゴリー対」が存在する。本稿で扱った議論の会話においても、NNS は意見表明を行う際に、「日本人は……だけれど」や「ネイティブスピーカーは……だけれど」というような自分とは異なるアイデンティティを示すことにより、その「カテゴリー対」になる「外国人(もしくは〇〇人)」や「ノンネイティブスピーカー」である「私」を表示しながら意見を述べている場面が見られる。以下にその例を示す。

### 5.2.1 「日本人」ではない「私」から見た「日本人」

【会話例4】は、初中級レベルの日本語学習者向けロールプレイテストを作成する段階での議論の一部分で、ロールプレイのテストを決めようとしている場面での会話である。

#### 【会話例4】

- 1 U: 私は別に::(1)韓国人と韓国人じゃなければ::誰でもいいと思う(1)別にその中
- 2 級の人
- 3 R: え↑でも私の場合は::例えば(.)その(1)前の評価したとき::(.)い(.)一体
- 4 私の聞き::(1)聞き能力が悪いか::(.)そのほんとに(.)最初の(.)その言葉も分
- 5 からないから::(.)なかなか評価できないの(1)その(.)発音とか(.)
- 6 U: うん
- 7 R: だからもし:(.)最初そういう段階で(.)まあ(.)日本人は一応その(.)何の言
- 8 葉::を指すのか(.)すぐ分かるじゃない↑その日本語の場合は(.)わから+
- 9 (.)あの分かりにくいけど<以下略>

この【会話例4】は、R(NNS)がU(JNS)のテストは誰がやってもいいとする意見(1-2

行目)に反論するところから始まっている(3行目)。反論の根拠として R(NNS)は同じ講義の中で、以前テストの評価をしてみた時の感想を話し(3-5行目)、「なかなか評価できないの」(4行目)と、評価をすること自体がとても大変だったことを語っている。その後、「日本人は……すぐ分かるじゃない」(7-8行目)と他の会話参加者である U(JNS)と T(JNS)に同意を求めている。

ここで Sacks の「カテゴリー対」の概念と照らし合わせてみると、7-8行目で R(NNS)が U(JNS)と T(JNS)に対して行った「日本人」というカテゴリーづけは、R(NNS)の「非日本人」というカテゴリーの表示でもあると考えられる。

### 5.2.2 「ネイティブスピーカー」ではない「私」に対する「ネイティブの方」

次に示す【会話例5】では、R(NNS)が「ネイティブスピーカー」ではない「私」に対峙するアイデンティティを「ネイティブの方」と呼んでいる。

#### 【会話例 5】

- 1 R: あ!例えば::その留学生は日本人の(1)例えば何かそういう誘いに対してそういう
- 2 反応を見て(. )自分はどう解決するか:(1)うまく伝えるか自分の言いたいことを::
- 3 T: ん
- 4 R: (1)まそういう場合は:一応ネイティブのかただから::hh そ(h)う(h)い(h)う
- 5 nhhhhh
- 6 U: °ネイティブのかた° hh
- 7 T: nhh
- 8 R: なんという↑自分の(1)相手に対して>そういう<(. )相手はどういう表情や言
- 9 葉遣いに:<以下略>

この【会話例5】の会話参加者である、R(NNS)、T(JNS)、U(JNS)の3名は、同じ大学の授業を受ける「学生同士」というカテゴリー集団に属する。つまり、この会話参加者の間には敬語表現を用いなければならないような上下関係は存在しない。それにもかかわらず R(NNS)は、あえて「一応ネイティブの方だから……」(4行目)と「人」ではなく「方」を用いることによって、会話の中でユーモラスに JNS が「私」とは異なる成員カテゴリーであることを示している。

R は【会話例5】で、留学生は日本人の誘いに対する表現を即座に判断することができないことを述べ(1-2行目)、その後「ネイティブの方」であればそのような心配はない

大和祐子

(4-5行目)と述べている。この点に着目すると、単に「留学生」について語ることによって発話者である R(NNS) が自分自身のこと表現しているだけでなく、ノンネイティブスピーカーの対であるネイティブスピーカーのことを、あえて「ネイティブの方」と自分の属する対よりも高めるような表現を用いることで、「日本人学生がロールプレイの相手役を行うことがふさわしい」という自分の意見の裏づけを試みている、と見ることができるだろう。

## 6. 考察:意見表明にアイデンティティを表示すること

ここまで、議論の会話における NNS の「私」の表示の様相を観察してきた。これまでの観察で、反論や提案など意見表明を行う過程で、会話参加者が「私」自身のこと、もしくは対に「私」のアイデンティティを他者に投影することは、異文化間交流を目的とする議論<sup>2</sup>とは異なる、今回のような議論の場合でも、頻繁にみられることであることが明らかになった。

本稿で扱った議論の会話は、同じグループワークに取り組む「学生同士」という対集団に属す会話参加者が行った会話である。しかしながら、意見を表明する過程で、「学生同士」という対集団から「〇〇人／日本人」、「日本語非母語話者／日本語母語話者」という対への変化がみられた。

それでは、議論のどのような場面でこれらの対が現れるのだろうか。

まず、対が現れる典型的な例として、既に他の参加者から提示された意見や提案に対する反対意見を表明し、理由をつけて説明しなければならない場面があげられる。本稿の場合であれば、【会話例2】、【会話例4】、【会話例5】がそれにあたり考えられる。他に、対があらわれやすい例としては、【会話例3】のように、会話参加者が議論をする上で参考となる情報を提示する場面がある。

この2つの場面に共通する点は、議論の中で「ユニークな(他の会話者がもっていない)情報」を提供する点が多い、ということではないだろうか。ある会話参加者が反論をして、その理由を述べる時に、それを説得力のある意見にするため、もしくは議論を促進できる情報を提供するためには、どのような会話参加者であれ、Sacks のいう「対

<sup>2</sup> 異文化交流を目的とする対話活動を本稿と同様に「成員対集団化装置」を用いて分析した論文としては、杉原(2003)などがある。

対」をつくることが有効である可能性が高い。特に、本稿で主として観察してきた NNS の場合、第二言語使用環境で接触場面会話を行うことにより、「カテゴリー対」を用いた意見表明を比較的行きやすい状況にあった、といえる。

それでは、このような状況で行われた議論会話において、NNS が意見表明することとはどういうことなのだろうか。

本稿で見てきた会話例では、上述のように、NNS 自身のアイデンティティの表示を含む意見表明がいくつも観察された。既に見てきたいくつかの例のように、自分自身が「日本語学習者」や「〇〇人」などのカテゴリーに属することを表明するのは、NNS が意見表明を比較的上手く行う上での戦略となりうるものであろう。

しかし、それだけではなく、NNS が「私」を表示することで表面化したカテゴリー対によって、JNS を含む他の参加者にとっても、「議論を深めていく」きっかけとしてプラスの作用をしていると考えられる。例えば【会話例3】では、「学習経験者」として J(NNS)は自分の「学習者」としての経験を語っているが、そのユニークな(他の参加者がもっていない)情報により、その後議論が発展していく可能性があると予想される。

その一方で、NNS が意見表明を行う際、「学習者」や「〇〇人」としてのカテゴリーを表面化させることは、接触場面で議論を行うにあたって、「学生同士」というカテゴリー集合より「〇〇人／日本人」というカテゴリー対が優先されて議論が進んでいく危険性もあると考えられる。

議論における NNS による「私」の表示は、議論という社会的行為を通して「私」自身をどう捉えているか、を知るものでもあるといえるだろう。【会話例2】における R(NNS)は、第二言語使用環境において、自分自身を「学習者」と捉えていることが分かる。一方で【会話例3】における J(NNS)は、自分自身を既に日本語の学習を終えた「日本語学習経験者」としてみていることが分かる。

これらの NNS による「私」の表示は、単に意見表明を上手く行う戦略というだけでなく、明らかに第二言語使用環境の「私」を意見表明という形を通して「声」として表現していると考えられる。

大和祐子

## 7. おわりに

本稿では、主にNNSが自分自身によって表示するカテゴリーを通して、示されるNNS自身の社会的アイデンティティとしての「私」について観察してきた。本稿で示した例から、議論会話の意見表明の様相が分かるだけでなく、第二言語使用環境にあるNNS自身が捉える自分の立場が議論会話でのふるまいを通して垣間見えてくる。

しかし、会話は相互行為であり、他の会話参加者との関係性や他の会話参加者の思惑が会話に反映され、影響を与えることは少なくない。例えば、「○○(国名)ではどうですか」や「あなたが日本語を学習したときは・・・」など他の参加者からの質問によって、「私」自身が意図せずとも、カテゴリー化された状況に応じた、期待に応じた発話を行うことになることが予想される。議論におけるこうしたアイデンティティが関わる発話についての考察は、今後の課題としたい。

### 文字化資料の記号

本稿では、好井ほか(1999)などでも使用されている、会話分析で推奨されている文字化の方法を援用した。

重なり	[ ]	ことばの途切れ	+
密着	=	呼気音・吸気音	hhhh
聞き取り困難	(...)	音の大きさ	___(大)、°°(小)
沈黙・間合い	(.)	音調	?、↑(上昇)
ex.3秒の間合い	(3)	・イントネーション	。、↓(下降)
音声の引き延ばし	.....	注記	(( ))

## 参考文献

- 杉原由美 2003 「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践エスノメソドロジーの視点からー」『世界の日本語教育』13号
- 西阪 仰 1995 「成員カテゴリー」『言語』第24巻11号、104-109頁 大修館書店
- 西阪 仰 1997 『相互行為分析という視点』金子書房
- 好井裕・山田富秋・西阪仰 1999 『会話分析への招待』世界思想社
- Brown, G. and G. Yule. 1983 *Teaching the Spoken Language*. Cambridge Univ. Press
- Labov, W. 1972 The Transformation of Experience in Narrative Syntax. *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. pp 214-226.
- Sacks, H. 1972 On the Analyzability of Stories by children, in Gamparz, J. J. and D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, pp. 325-345.
- Schegloff, E. A. 1991 Reflections on talks and social structure, in D. Boden & D.H.Zimmerman (eds.), *Talk and Social structure*, pp40-70.

